かけはし～デフリンピックから考えよう～第69号

東京デフリンピックが11月15日から26日までの12日間開催されました。デフリンピックは4年に1度夏季と冬季の大会が開かれるろう者の国際スポーツ大会です。1924年にパリで第1回大会が始まり、100周年の今年日本で初めて開催されました。テレビ中継は少なかったのですが、バレーボールの日本戦を観戦しようと会場を訪れた漫画家のやくみつるさんは会場に入れないほど盛況だったそうです。

東京大会には80の国・地域から約3000人の選手を協働通訳技術の研修を受けた国際手話通訳者約100人と日本語手話通訳者約140人が選手や審判員の意思疎通をサポートしました。ただ、手話通訳者の人数が足りておらず、日程調整には苦労があったようです。また、手話通訳者の報酬は高い専門性や需要の増加に見合っていないのが現状ですが、30年前は『無料』が当たり前だったそうで、少しずつ変わってきているのかなと感じます。変わっていくためには私たちが関心をもつことが大切だと考えます。手話言語条例が2017年に奈良県で、2023年に橿原市で制定されていることを紹介しておきます。

今回のデフリンピックでは21の競技が行われ、バレーボールのようにオリンピックと審判の進行手法があまり変わらない種目もあれば、陸上競技のようにオリンピックでは使わない機器をつかう種目もありました。スタートに関することなのですが、オリンピックの陸上競技では審判の声とピストルの音でスタートの合図をしますが、デフリンピックのスタートは光刺激スタート発信装置が使用されました。開発したのは東京都立中央ろう学校竹見昌久教諭です。竹見さんの開発した装置は2009年の台北デフリンピックで使用されたものをヒントに、屋外でも見やすいように、走り出したときに足が装置に引っかからないように、などの改良されたものです。選手の手元に設置された装置が「位置について」で赤、「用意」で黄色、「スタート」のピストルと同時に緑の光が点灯する仕組みです。この装置は開発に8年かかったそうです。約15年前、ろう学校の陸上部顧問だった竹見さんの教え子は高校最後の大会、インターハイ予選200mに臨みました。「バン!」ピストル音が響き、選手たちが一斉に走り出し、教え子は周囲を見て、慌ててスタートを切り、懸命に他の選手の背中を追いましたが結果は最下位でした。100分の1秒を争う競技では致命的な遅れでした。試合後、泣きじゃくりながら聞こえない不利を訴える教え子に返す言葉もなく何もしてあげられなかったことが、8年もかけて作成した想いの原点だそうです。聞こえる選手よりもスタートが遅れる場面を何度も目の当たりにしてこられた竹見さんは、全国のろう学校や大会などを回って装置の採用を訴えましたが、ピストルという合図がある以上、聞こえない選手も従うべきだという考え方が主流で反応は冷ややかだったそうです。それでも、教え子の涙を忘れられず、地道に普及活動を続けた結果、2022年ブラジルのカシアス・ド・スル大会で初めて公式機器として採用され、今回の東京大会でも使用されました。最後に竹見さんの言葉を紹介します。「聞こえる人も、聞こえない人も、聞こえづらい人も、思い切り競技ができる世の中にしたい。この大会が、ただ、聞こえない人がスポーツをやるだけで終わるのではなく、社会が気づきを得られる機会になるといい。」と語っておられます。　人権・地域教育課